

あなたの子ですが、
内緒で育てます



ルドヴィク

グラナティア王国の国王。
王の血を引く者だけの、
特別な力を持つ。



デルフィーナ

王妃候補だった令嬢。
セレーネの目を盗んで
ルドヴィクの子を身に着す。

ロゼツテ

デルフィーナの娘。
ルドヴィクと同じ
力を持つが……

ジュスト

ザカリアの腹心。
幼い頃から彼に仕える、
家族同然の存在。



ザカリア

ルドヴィクの異母弟。
王宮に寄りつかなかったが、
セレーネの窮状を知り……？

セレーネ

ルドヴィクの妃に選ばれたが、
デルフィーナにより
地位を奪われた悲劇の王妃。

ルチアノ

セレーネの息子。
ザカリアを父のように
慕っている。

CHARACTERS



プロローグ

「なぜ、お前がここにいる!」

薔薇窓のステンドグラスを通り抜けた光が、白い大理石の床を鮮やかに照らしている。

その光のもとにいるのは、妖精のように美しい王妃セレーネだ。腰まで伸びた長い銀髪と静謐な青の瞳、白磁のような肌は、七年経っても変わっていない。

セレーネは再会に動揺する俺を見て、王妃らしい落ち着いた態度で微笑んでいる。

いや、正しくは元王妃だ。七年前、行方不明になり、死んだと思っていた。

だが、セレーネは生きていた——生きていたのだ。

グラナティア王国の王宮。謁見の間に現れた彼女は力強い声と存在感を放っていた。

「国王陛下にお会いするため、王宮へ戻ってまいりました」

——今さら、なぜだ？ お前は王にふさわしくないと、俺を断罪するために現れたのか？

昔の記憶が一気に蘇ってきた。

『アルジェント侯爵家の才女と名高いセレーネ様であれば、陛下の支えとなってくれるでしょう』

『この国を豊かにしたいという考えもお持ちです』

大臣たちは口を揃えて、セレーネを王妃にしてはどうかと俺に勧めた。妃候補時代のセレーネはおとなしく控えめ、美人で賢く、妻にするには申し分のない女性だった。

俺自身も『まあ、彼女なら俺の隣に並んでも見劣りしないだろう』と思ったくらいだ。

だから、彼女を妻にした。しかしセレーネは王妃となった途端、知識と美貌を利用し、周囲を取り込んで俺の立場を脅かそうとしたのだ！

——とんでもない女だ。

セレーネはなにを考えているのか、慈悲深い聖母のように微笑み、動揺する俺を見つめている。彼女への愛が冷めたのは、彼女が俺よりも活躍し、王の威信を傷つけたからだ。でしやばらずに俺の後ろに控えていれば、彼女は妻として『合格』だったというのに。

俺たちの蜜月は数カ月程度で終わった。

それは妻のセレーネではなく、浮気相手のデルフィーナのほうが先に、俺の子供を身籠ったからだ。彼女は王の子を身籠ったことで、セレーネから正妻の座を奪い、王妃の地位を手に入れた。

「セレーネ……！ 今さら戻ってくるなんて……！」

セレーネを前にして、勝者であったはずのデルフィーナは扇子を握り締め、声を震わせた。赤髪に赤茶色の瞳、気の強い美人である。セレーネとは真逆のタイプだ。

「ご安心ください。あなたからルドヴィク様を取り返そうなどと、私は微塵も思っていないです」

「ふっ、なにを言い出すのかと思えば……。ルドヴィク様を奪い返す自信がなければでしょ？」

デルフィーナは額に汗を浮かべながらも、鼻で笑った。七年前のセレーネであれば、悲しげな顔

でうつむくだけだったはずだ。しかし、セレーネは氷のように冷たい目をして答えた。

「いいえ。本心です」

——俺への愛はどこへ行った？

七年前は十八歳だったセレーネも二十五歳。年齢を重ねたセレーネは落ち着き、自信に満ちて以前より輝いて見えた。着ているドレスも最新の、軽やかで動きやすいものだ。デルフィーナが着ている一昔前の重そうなドレスとは違う。

「昔、私たちは妃候補として王宮へ上がりました。そして正々堂々と争い、私が王妃に選ばれた。でも、デルフィーナ。あなたは私の夫を奪った」

「奪われるほうが悪いのよ！ 先に子供を身籠ったのは、このわたくし。あなたではないわ！」

「奪われた私が悪い、という考えなのですね？」

セレーネの語気は強くないが重く、揺らぐことのない芯を感じた。昔の弱い彼女とは違う。

優位な立場なのは俺のはずだが、気づけば、彼女に言い訳をしていた。

「セレーネ、お前を捨てた俺を悪く思うな。デルフィーナは俺の子を身籠った。だが、お前は……」

「そうですね。私が王妃として仕事をこなしている間、あなたは裏で別の女性と浮気をしていた」

「王家には跡継ぎが必要だ！ 俺は王の仕事をしただけだ！」

セレーネの青い瞳は氷のように冷やかだった。俺はその目に負けじと話を続ける。

「王の子は、グラナティア王国にとって最も重要な存在だ。お前も直系王族だけに現れる特別な力のことは知っているだろう？」

「この国の人間であれば、誰もが知っていますわ」

「ならば、わかるはずだ。デルフィーナは王の血を引く子を身籠った。それがなにを意味するか」

「ええ、そうですね。王の血を引く子供は特別な力を持ち、王になる可能性がありますから」

——やけに物わかりがいいな。

セレーネの態度が不気味に感じた。

「ですから、私の子にも王になる資格があります」

「は……？」

それは寝耳に水、突然の告白だった。

「お前の子だど？」

セレーネの後ろに隠れていた小さな人影が動いた。銀髪に青い瞳の男の子だ。セレーネによく似ている——七歳くらいだろうか。デルフィーナが産んだ王女、ロゼツテよりもすっかりして見えた。

「あなたの子です」

セレーネはなんのためらいもなく、俺に告げた。

「なんだと！」

「嘘おっしやい！」

衝撃のあまり、俺とデルフィーナは同時に椅子から立ち上がり、セレーネを見下ろした。彼女はたじろぐどころか、子供の背を優しく押して、自己紹介するよう促した。

「はじめまして、ルチアノです」

ルチアノは利発で賢そうな子供に見えた。だが、その態度からは初めて父に会えた喜びを感じない。『父上に会えて嬉しい』とも口にできなかった。

——待て、冷静になるんだ。もしや、俺の子ではないのでは？

「……俺の子だという証拠はあるのか？」

彼女は神託を下す巫女のように、淡々とした態度で俺に告げた。

「ええ。ルチアノが王の子である証拠に、ルドヴィク様……あなたの力は消えたはずです」

グラナティア王家の直系は、普通の人間にはない力を持つて生まれる。未来予知であったり、人の心を読んだり、遠くが見えたりなどの力だ。だが、その力は永遠ではない。次の王が妻の胎内に宿ると、王は徐々に力を失う。いずれ、王は無力となる運命にある。

力を残すのは、即位したことがない直系王族と王の子だ。

——俺が力を失ったのは、デルフィーナが身籠ったからだと思っていたが、違ったと？

「ルドヴィク様が力を失ったのは、ロゼツテがわたくしのお腹に宿ったからよ！ ロゼツテこそが正統な王位継承者だわ！」

「それはどうでしょう？ 私とデルフィーナは同時期に子を宿しました。ルチアノは、ロゼツテ王女と同じ日に生まれたのです」

感情的なデルフィーナに対し、セレーネは冷静で、嘘を言っているようには見えなかった。

「つまり、七年前……王宮から逃げたお前の腹には……」

顔面が硬直し、口の中が乾く。うまく言葉を紡げない。セレーネはそんな俺の様子を冷徹に眺め、

慈悲を与えることなく、過去に起きた事実だけを述べた。

「ええ。逃げた後で、私のお腹にルチアノが宿っていたことに気づきました。けれど夫の愛情を失い、実家の後ろ盾も期待できなかった私には、王宮へ戻って子を育てる自信がありませんでした」再度ルチアノをまじまじと見つめた。落ち着いた態度。同い年というロゼッテよりも年上に見える。子供の一歳差は大きい。俺と別れた後にできた子ではなさそうだが……

「嘘よ！ ルドヴィク様の子だと偽っているに違いないわ！」

デルフィーナが半狂乱になり、ルチアノの存在を否定する。だが、セレーネが王の子と断言するからには、ルチアノもまた王の子にだけ現れる力を持っているのではないか。

王の子を騙る者は、死罪だ。そんな危険を冒してまで、彼女が嘘をつくだろうか。

「本当に王の血を引くのであれば、その子供もまた正統な王位継承者……」

「ルドヴィク様！ セレーネの言葉を信じますの？」

ルチアノは大人びた顔で、黙って話を聞いている。七歳とは思えない思慮深い子供だ。

「ルドヴィク様。力を失った王は王位を退かねばならない。そうでしたわよね？」

七年の時を経た今、なぜセレーネが王宮に戻ってきたのか。俺は気づいてしまった。

——これは復讐だ。

俺と浮気相手のデルフィーナに復讐するため、セレーネはルチアノを連れて帰ってきたのだ。

俺から王位を奪うために——

第一章

今、グラナティア王国王宮では、国王陛下の妃選びが佳境を迎えている。

大勢の令嬢の中から選ばれ、妃候補として残ったのは二人。アルジェント侯爵令嬢の私とルビノ伯爵家のデルフィーナだった。

『どちらが王妃になるのか？』

最終的な決定を聞くために、私とデルフィーナは謁見の間に呼ばれた。

謁見の間では、大きな窓から差し込む光が空の玉座を照らし、王のお出ましを待っている。

周囲には、むせかえるような甘い芳香が漂っていた。私の隣にいるデルフィーナが、張り切って香水をつけすぎたせいだ。

最終的な結果は、ルドヴィク様の口から発表されると大臣から聞いている。でも、まだ姿を現していない。私は緊張気味にお出ましを待っているけれど、デルフィーナは自信があるのか、今にも鼻歌を歌い出しそうなくらい機嫌がいい。その余裕を証明するかのように、彼女は私に囁いた。

「ルドヴィク様はわたくしという時が一番楽しいとおっしゃっていたわ」

「そうですか」

デルフィーナのわかりやすい牽制を受け流し、静かに微笑んで沈黙した。

私の目的は結婚ではない。王妃になって、やりたいことがある。ルドヴィク様とさほど親しくなかった私が妃候補に推薦されたのは、国王の助けとなる女性を大臣たちが望んだからなのだろう。だから亡きお父様が遺してくれた知識を使い、グラナティア王国をより豊かな国にしたい——

グラナティア王国は大陸の北にあり、冷害で農作物の収穫は不安定になりがちだ。人々が飢え、餓死者が出る年も少なくない。お父様はそれを改善したいと、身近な植物の研究を続けてきた。

——お父様は志半ばで亡くなってしまった。でも、私はその研究を引き継ぎ、この国のために役立てたい。そのためなら、喜んで王妃になろうと思う。

男性ならば学府へ入り、学者になる道がある。でも、私は女性。女性に政治は任せてもらえず、学府にも入ることができない。ただ良き妻、良き母であることだけが求められる。

私がお父様の遺志を継ぎ、飢えない国にするためには、王妃という道が最短だった。

ルドヴィク様は現在二十一歳。私とデルフィーナたち妃候補が十六歳から始まった選定は一年から、今は十七歳。結婚式は、行事が少ない今年の冬。年が明けたら、私たちは十八歳になる。

最終候補に残ったルビーノ伯爵家のデルフィーナは華やかで、昔から社交界で目立つ存在だった。娘に期待したルビーノ伯爵はお金を使い、王宮の侍従と侍女たちを味方につけた。試験内容を盗ませ、前もって娘に教えたという噂もある。ルビーノ伯爵は『経済力も実力のうち』と言って、恥じるどころか堂々としている。

その点、私に疑われる心配はなかった。学者の娘で、侯爵とは名ばかりの貧乏貴族。撒くお金があるのなら生活費に回される。大臣たちに推薦されなければ、早々に候補から外されていただろう。

デルフィーナは赤い髪を手で払い、自信たつぷりな笑みを浮かべた。

「結果は見えているけれど、この私と妃の座を争ったことを自慢にしていいわよ、セレーネ？」

「デルフィーナだけでなく、他の令嬢も素晴らしい方ばかりでした。今ここに私が残っているのは、ただ運がよかっただけだと思いますわ」

私が敬称をつけずにデルフィーナと呼ぶのは、彼女自身が『わたくしとあなたは同じ妃候補。親しみを込めて対等に名前呼び合いましょ』と望んだためだ。

「あなたは運でしょうね。でも、わたくしは違うわ。お父様はね、わたくしが王妃になった時のために、他国から高価な生地を取り寄せたのよ。仕立屋にドレスを新調させているの」

辺境とはいえ、豊かな領地を持つルビーノ伯爵家は裕福だ。一方、アルジェント侯爵家は剣で爵位を手に入れた家柄。その上、活躍したのは大昔の話である。今では体裁を保てるギリギリの生活だ。でも、私はそれを恥ずかしいと思っていない。与えられた貴族の身分と領地は、自分たちが贅沢するためでなく、国へ貢献するためにあるとお父様から教えられてきた。

「お兄様も気が早くて困っているの。王妃になったら、立派な調度品がいるでしょ？ 有名な職人に作らせるって張り切っていたわ」

「そうですか。皆さん、お忙しいのですね」

終わりそうもないデルフィーナの自慢話に、軽く相槌を打って話を流す。私の兄は『王妃になれば修道院へやる』と私に言った。お兄様は私を嫌っている。原因はお父様だ。

お父様は少し変わった人だった。学問をやるのに性別は関係ないという珍しい考えの持ち主で、

幼い頃から娘の私にも兄と同等の学問をさせた。

家庭教師は、私のほうがお兄様より物覚えがいいと言って褒めた。でも、どんなに勉強しても、学府に入れるのは男性だけ。貴族の子弟が通う寄宿学校へ入る権利があったのは、お兄様だった。

お兄様は寄宿学校に入り、学府を目指した。学府とは、寄宿学校の成績上位者だけが進める最高学術機関である。けれど、お兄様は学府へ入れなかった。お父様はがっかりして、『セレーネが男の子だったらなあ』とぼろりとこぼした。その言葉にお兄様は傷つき、私を恨むようになった。

お父様が亡くなってから、侯爵家の当主となったお兄様は、気に入らない私を修道院へ追いやるうとした。それが、修道院へやる前に王宮から妃候補の話が来た。

侯爵家にとって喜ぶべき名誉なことでも、お兄様には体のいい厄介払いでしかなかったのだ。

私が王宮へ行く日、お母様はお兄様に遠慮して、見送りに出てこなかった。その時の、屋敷の中から満足そうに私を見ていた兄の顔は、今でも忘れられない。

「ねえ、セレーネ。すごいでしょ？ わたくしが王妃になる日を家族全員が楽しみにしているの」

「ええ。素敵なご家族だと思います」

家族に愛されたデルフィーナと自分の境遇があまりにも違いすぎて、遠い世界のように感じた。

「あなたのお父様は、雑草の研究をしていたんですって？」

「雑草という植物はございません。野に咲く花の一つ一つに名前がありますわ。お父様と私は植物研究録の編纂に明け暮れて、食事などの日常生活を忘れるくらいでした」

私がお父様との暮らしを語ると、デルフィーナはくすくすと笑った。

「あら、そう？ それはごめんなさいね」

明らかに、馬鹿にされている。私がただ微笑みを返すと、彼女は面白くなさそうな顔をする。

——わかつているわ。ルドヴィク様の妻になるのは、きっとデルフィーナ。二人が親しげにしているところを何度も見たもの。

デルフィーナに悟られないように小さな溜め息をついた。ここまで来られたのは奇跡のようなものだ。ルドヴィク様に植物のことや政治の話題を振っても退屈そうな顔をされ、興味すら持ってもらえなかったのだから。

「ほら、セレーネ！ ルドヴィク様がいらつしやったわよ！」

ルドヴィク様が現れ、ゆつくりと玉座へ向かう。

長い深紅のマントが、白い大理石の床に広がった。窓から光が差し込むと、金糸で施された植物模様の刺繍が輝く。ダブレットには、さらに細かく刺繍が施されている。その豪華な装いには、王としての権威が感じられた。

装いだけでなく、ルドヴィク様は容姿も麗しい。艶やかな黒髪に黒い瞳、目元は優しげで、顔立ちは彫刻のように整っている。贅沢に慣れていない私には、その壮麗な姿がまぶしく見えた。

全員がルドヴィク様に頭を下げ、彼が玉座に座るのを静かに待った。

「大臣」

低く、よく通る声が広間に響く。とうとう審判の時が来た。

「かしこまりました」

大臣はルドヴィク様に近づき、深紅のリボンで巻かれた書状を渡す。ルドヴィク様が、リボンを外して紙を広げる。

デルフィーナが澄ました顔でちらりと私を見て笑った。「さようなら、セレーネ」という囁きが聞こえてくる。

——王妃になるのはデルフィーナ。私もここまで、よく頑張ったわ。

私は心の中で自分の健闘を称え、絶望に備えた。そして修道院行きを覚悟した瞬間——

「セレーネ・アルジェント侯爵令嬢を我が妃とする」

広間に響いた声が、私とデルフィーナの未来を分かť。

「えっ……？」

——私が、王妃？

耳にした言葉を信じられず、顔を上げて、ルドヴィク様と大臣たちの顔を交互に見た。

驚いているのは、私だけではなかった。

「どういうことですか」

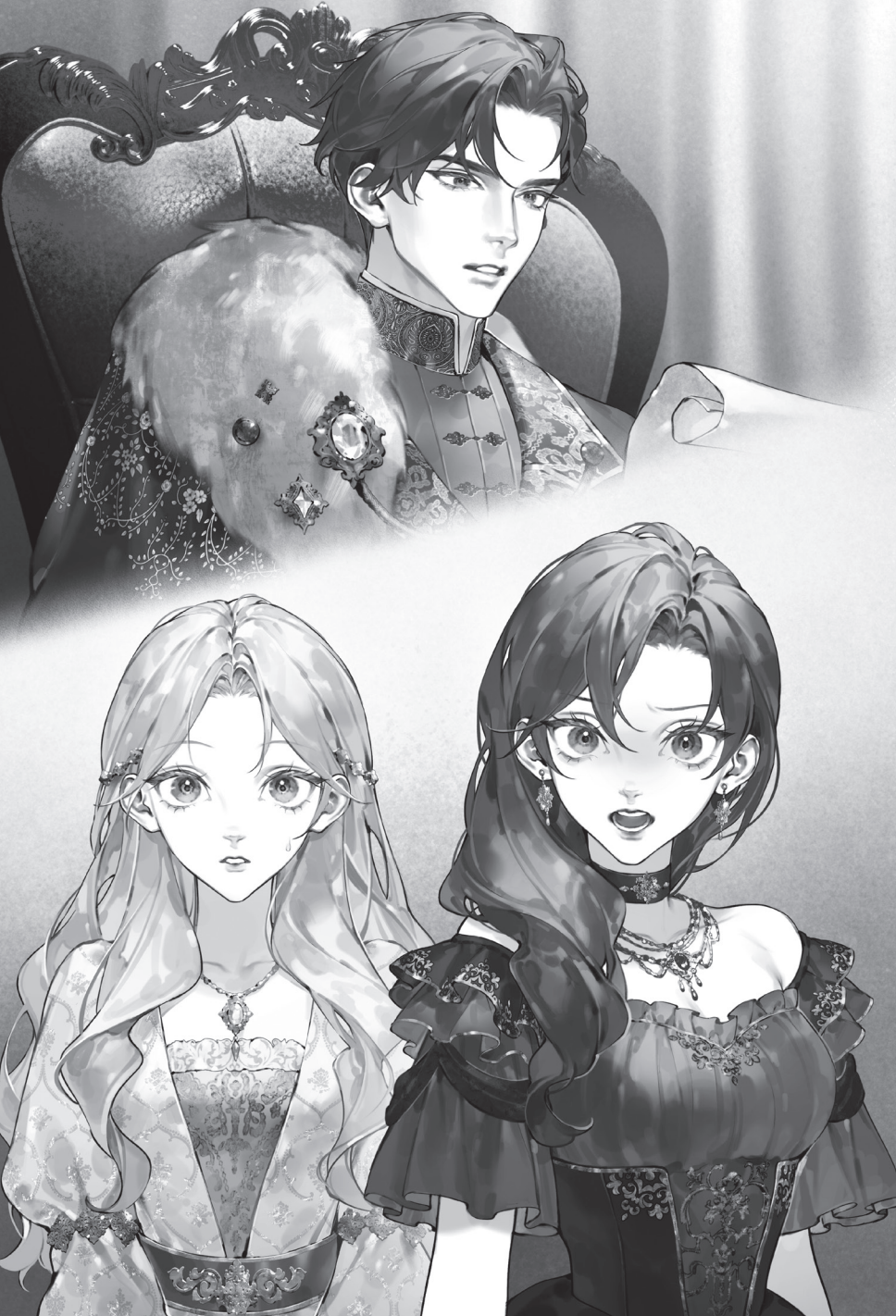
自信たっぷりだったデルフィーナが青ざめた顔で声を荒らげた。

「ルドヴィク様！ わたくしと一緒にいるのが一番楽しい、とおっしゃっていたでしょう!？」

その声は悲鳴に近かった。だが、大臣は容赦がない。

「デルフィーナ・ルビーノ伯爵令嬢。これは陛下の決定でございます」

「王の前で見苦しく騒ぐのはいかなものか。敗者は優雅に去るべきでは？」



居並ぶ大臣たちの言葉にデルフィーナは顔を真っ赤にして、唇を噛んで身体を震わせた。そんな彼女にルドヴィク様は優しく声をかけた。

「悪く思うな。お前に魅力がないとは言わない。だが、俺に必要なのはセレーネだ」

——ルドヴィク様は、私を必要だと思ってくれているの？

修道院へ捨てられる予定だった私をルドヴィク様は『必要だ』と言ってくれた。

その言葉が、心から嬉しかった。

「デルフィーナ。お前は俺の妃にはなれなかったが、妃候補でなくなった後も俺を名前で呼ぶ榮譽を与えよう！」

親しい者だけが、ルドヴィク様を名前で呼ぶことができる。それをデルフィーナは許されたのだ。けれど彼女は返事をせず、先ほどの友人のような態度から一転、私を憎々しげに睨みつけた。

「セレーネ、あなた、前もって大臣から聞いていたんでしょ！ 自分が王妃に選ばれると知っていたから、あんな澄ました顔をしていられたのね！」

「いいえ、知りませんでした。発表があるまでは……」

「嘘をおっしやい！」

私の言葉を遮るデルフィーナからは、激しい怒りと憎しみを感じた。放っておいたら、怒りのあまり殺されてしまいそうなほどの迫力だった。

「デルフィーナ、控えろ。セレーネは嘘など言っていない」

ルドヴィク様のほうを見ると、彼の黒い瞳が深紅に染まっていた。

広間にいた全員が視線を奪われる。時が止まったかのような静寂が広間を包み込んだ。

——これは、グラナティア王家の力……！

グラナティア王国直系の王族だけが持つ不思議な力。その力を使う時、瞳の色が変わるといふ。

大臣たちは跪き、私とデルフィーナも慌てて頭を下げた。

「セレーネは嘘を言っていない。この俺が証明しよう」

——私の心を読んだの？ 本当に？

「本当だ」

口にしていないはずの心の声に、ルドヴィク様が答えた。私は驚いて顔を上げる。

「今、私の心を読んだのですね」

「お前だけでなく、大臣たちの心も読める。そうだろう。大臣？」

「さようでございます。偉大なる陛下」

「グラナティア王家の力を見せていただけるとは、恐悦至極に存じます」

大臣たちは床に額をこすりつけ、平伏している。心を読まれては、誰一人としてやましいことを考えられない。

「セレーネ、お前が王妃だ。グラナティア王家に尽くし、王妃として俺を支えるように」

「はい！ 精一杯、頑張ります」

ルドヴィク様の言葉を聞いたデルフィーナが泣き出した。それと同時にルドヴィク様は力を使い終えたのか、深紅の瞳が黒い瞳へ戻っていった。

「さあ、ルビーノ伯爵令嬢。王宮の馬車で伯爵家の屋敷まで送りましょう」

大臣たちは早々にデルフィーナを退出させようと、数人で彼女を追いつた。

「セレーネ。これで勝ったと思わないことね」

去り際、デルフィーナは私の勝利を呪うように、不穏な言葉を残していったのだった。

結婚式を終え、ルドヴィク様と夫婦になって三カ月。

私はお父様の知識を使つて大活躍——には、まだ至っていなかった。

今日も、私は失敗してしまつたようだ。

夫婦二人でお茶をする予定だつた昼下がり、私は国王の執務室に呼び出された。ルドヴィク様は机の上にバンツと礼状の束を叩きつけた。

「セレーネ。教会や隣国から礼状が届いている。なにをした？」

礼状の束を手を取つて確認する。それは各地の教会と隣国からだつた。

「隣国からのお礼状です。以前パーティーで親しくなつた隣国の王妃様にお世継ぎが生まれたと聞き、メッセージを添えて、お祝いの品を贈りました」

ルドヴィク様は執務机に肘をつき、溜め息をついた。

「二通目は教会からですね。教会では毎週、子供たちに文字を教えているとのことでしたから、グラナティア王国内の各教会にインクを寄付いたしました。なにが問題がございましたか？」

「問題かどうか、お前はそれすらわからないのか？ 俺に相談がなかっただろう！」

ルドヴィク様がますます不機嫌になった。

最近、こんなやりとりが多い。私たちの関係はぎくしゃくしていた。

「ご相談なく決めてしまい、申し訳ありません。では、こちらをご相談したいのですが……。文字を教えるのに使う、教材用の本です。こちらを寄付してもよろしいでしょうか？」

ルドヴィク様はふつと鼻先で笑つた。

「金を使えば感謝されるのは当たり前だ。お前は王家の金で自分の評判を上げようというのか？」

「違います！ そんなつもりはございません。寄付や贈り物に使うお金は、私のドレスを新調するのを減らした分で賄っています」

大臣たちも快く了承してくれたことだ。なにも私一人で決めたわけではない。

「みすばらしさを誇られてもな」

「私の父は学者でした。父は領地からの収入の多くを、国の将来を見据えた研究のために使っていました。私も同じようにしたいと考えています」

「ああ、雑草の研究をしていた……」

「植物です」

私が訂正すると、ルドヴィク様は咳払いをして言い直した。

「……植物学者だったな」

グラナティア王国では、学者の地位が高い。国王を補佐する大臣は、グラナティア王国最高学術機関である学府の学者から選出されると決まっているからだ。

——これは、ルドヴィク様に私の考えを聞いてもらえるチャンスだわ。

「ルドヴィク様。ただの草と思われるものも国の一部であり、立派な財産です」

「雑草が財産だと？ 変わり者の学者の考えることはわからんな」

ルドヴィク様は冷たい態度で言い放つ。執務室に重い空気が流れた。

それでも私はくじけることなく、話を続けた。

「国の食糧事情の改善に取り組ませていただけませんか？」

「生意気な！ 王妃が政治に口を挟むとは……お前はただ着飾って、黙って座っていればいい！」

怒鳴られるとは思わず、私は驚いてルドヴィク様の顔を見た。彼は気まづくなったのか、早口で続ける。

「学者だったのはお前の父親であって、お前は学府にいたわけでもない。俺に政治を語っていいのは、学府から選出した大臣だけだ」

「けれど、私は父と一緒に植物の研究をしていました。一度、植物研究録を見ていただきたいのです。ルドヴィク様が駄目なら、大臣に……」

「そうしてまたお前の手柄にするのか。多くの金を使って、お前一人の手柄にな！」

ルドヴィク様は、完全に私を拒絶していた。

「下がれ。お前と話していると、俺の貴重な時間が無駄になる」

「失礼します……」

——私が王妃になったのは、なんの意味があったの？

執務室を出て、溜め息をつく。

「セレーネ様、顔色が優れませんか。どうかなさいましたか？」

気がつくと、ジュストが私の前に立っていた。彼は王妃付きの護衛騎士で、アッシュブルーの髪にサファイアブルーの瞳という涼やかな容姿の男性だ。

「ルドヴィク様に叱られてしまいました。隣国の王妃様への贈り物や教会へのインクの寄付を、ルドヴィク様にご相談なく行ってしまったから」

「そんな馬鹿な……つと、失礼しました」

「確かに私自身のお金ではありませんし。少し、考えてみます」

「大臣に相談してみてもいいかがですか？」

私は首を横に振った。大臣に許可を得ても、叱られてしまったのだ。それに、私がなにかするために大臣を動かそうとすれば、ルドヴィク様はまた不快に思うだろう。

——ルドヴィク様は立派な方だと思っていたのに、どうして？

冷たい態度にショックを受けながら、それでもまだ妻の私を愛してくれていると信じていた。



建物から庭園まで続く砂の色をした敷石が雨の名残を留め、しつとりと濡^ぬれている。淡く薄^{うす}絹^{ぎぬ}のような雨がやみ、土の香りが漂っていた。

隣には妻のセレーネがいて、優雅に花を——いや、違うな。花ではなく、庭の雑草を熱心にスケッチしている。セレーネは銀筆と羊皮紙を持ち歩き、絵を描いていることが多い。その上、なにをするのかと思えば、地面に落ちている小さな実を嬉しそうに拾い出した。

——は？ なにをしているんだ？ 今は夫婦の語らいの場だろう？

「おい、なんだ。その銀筆は……」

「これですか？ 銀筆は細い線を描けるので、植物の細かい部分まで表現できます」

「今、拾った汚い実は？」

「秋に落ちた実が春になっても残っていたので、なんだか嬉しくて。それに、この実はとても面白い実なんですよ」

「そんなことを聞いているんじゃない！」

セレーネは怒鳴られて驚いたのか、銀筆を固く握り締め、俺の顔を見つめた。しかし、くじけずに説明を続ける。

「汚い実ではありません。便利な効果があつて、話を聞いていただけたら……」

「お前は口うるさい教師か！ そんな小さな実に興味などない！」

セレーネは俺の思い通りに動く妻ではない。それが不満だ。イライラしていると、刈り込まれた樹木の横からゆったりした足取りで現れた者がいた。

「セレーネ王妃、先日はありがとうございます」

足元まである長いガウンを白いチュニツクの上から羽織り、幅の広い布のベルトを腰に巻いてい

る。教会組織に属する司祭だ。司祭には王宮内への出入りと礼拝堂の使用を許している。

『民の精神的支柱である教会とは、ほどよい距離で関わるべき』というのが大臣の意見だ。教会は他国にも影響力を持つ。不仲になるのは得策ではない。そんな微妙な関係の教会と王家だが、司祭は俺ではなく、セレーネに話しかけた。

「セレーネ王妃が手ずから本を書き写してくださるとは、思ってもみませんでした。子供たちも新しい本が手に入って喜んでいます」

「本当ですか？ 喜んでいただけでなによりですわ」

「なかなかできることはありません。この話を聞いた他国の王妃たちは、セレーネ王妃に倣^{なま}って本の書き写しを始めています」

各国には教会や修道院があり、こういった話はすぐに広まる。

——本を書き写しただと？

金を自由に使えなくなれば、目立つ行動を控え、おとなしくなるだろうと踏んでいた。だが、セレーネは手紙や招待状などを書くために用意された紙とインクで、子供用に本を書き写し、教会に寄付をしたのだ。

「読み書きができるようになった子たちは、いずれ国を支えてくれますわ」

「さすがセレーネ様。その通りでございます」

俺は妻の横で笑みを浮かべ、平静を装った。噴水のほうへ顔を向け、瞳を隠す。噴水の水面に映った自分の黒い瞳が徐々に柘榴^{ざくろ}の実のような赤色へ染まっていく——司祭の心が聞こえた。

『王の足りない部分を王妃が補っている。彼女は王と違い、素晴らしい人物だ』
なんだ、これは……。俺がセレーネよりも低く見られているだと。

「……様？ ルドヴィク様！」

セレーネに呼ばれてハッと我に返り、力を使うのを中断した。すでに司祭は去り、庭園にいるのは俺とセレーネだけだった。

「な、なにか用か？」

あまりの衝撃に声が上がったが、俺が力を使ったことにセレーネは気づいていないようだ。

「ルドヴィク様。大臣が呼んでいますわ」

大臣が回廊から、俺の様子をうかがっていた。一体なんの用なのか、学者を一人連れている。

「陛下、セレーネ王妃とご歓談中でしたかな？」

「いや……」

大臣は俺が力を使つたのを目撃したようだ。近寄ってこなかったのがその証拠である。誰でも自分の心を読まれるのは嫌なものだ。

今まで、俺を否定する者などいなかった。だが、今はどうだ。セレーネが俺の価値を下げている！

「学者が陛下に申し上げたいことがあるそうです」

学者は白髪に眼鏡、ローブ姿の老人だ。気難しそうな学者が、俺に深々と頭を下げた。

「陛下、昨年の農作物が不作だったことはご存じでしょうか？」

「大臣からの報告で聞いた。その対策として他国から穀物を買った。他にも問題があるのか？」

「向こう数年、寒さが厳しくなるという研究結果が天文学府より報告されました。収穫の少ない年が続きます。人々から取り立てる税を減らしてはいかがでしょうか」

「各領地の上納金と王領の税を軽くしてやれと？」

「それができないのであれば、民は飢えて死ぬほかございません」

俺が不機嫌になっても、正しいことを言っているという自信からか、学者は動じない。

——くそ！ 生意気な学者だ。これだから、学者は好きになれんのだ。

「お話し中、失礼します。ルドヴィク様、私の話を聞いていただけませんか？」

セレーネは怒鳴られても懲りずに口を挟んできた。生意気な。

苛立ちが頂点に達し、話を聞く前に鼻先で笑い飛ばした。

「誰がお前の話に興味がある。雑草の話で、俺の時間を無駄にする気か？」

口を開きかけたセレーネが、きゅっと唇をきつく結んだ。

そうだ。黙っている。にやりとした瞬間——

「うまくいくかわかりませんが、私には考えがあります！」

「黙れ！ このつ……でしゃばるつもりか！」

「でしゃばる……？」

俺とセレーネのやりとりを聞いていた大臣が、見かねて口を挟んだ。

「陛下、落ち着いてくだされ！ 学者は可能性について話をしているだけで、必ずしも冷害が起こ

ると言っているわけではありません」

「大臣、なにをおっしゃいますか。我々、天文を専門とする学者らの観測で、可能性は高く……」
「もう報告は十分だ。陛下は王妃と庭園を散策中ですから。可能性はあくまで可能性。夢の話をしているようなものです。お忘れください」

大臣はそう言ったが、学者は不満そうだった。その表情に俺は違和感を抱いた。

——まだ。司祭の時と同じだ。

いけない思いながらも、俺は再び力を使つて二人の心を覗いてしまった。

『王にはご理解いただけなかったか……。セレーネ王妃は寄り添ってくれたというのに！』

『才女と名高い王妃はなにか良い策をお持ちのようだ。もしかすると、王よりも優秀——』

大臣と学者は、俺の瞳の色が深紅に変化していることに気づき、怯えた表情を浮かべた。

「し、失礼します！ 陛下！」

「余計なことを申し上げました！」

二人は後ずさりし、逃げるようにして立ち去った。その態度が心の声を肯定してしまっていると感じずには。

「ルドヴィク様、具合が悪いのですか？ 顔が真っ青ですよ？」

セレーネがそつと俺の肩に触れようとしたが、その手を乱暴に振り払った。

「俺に触れるな！」

「申し訳ございません……」

彼女は傷ついた顔をしたが、傷ついているのはこちらだ。王である俺より妻のほうが優秀などと、そんなことがあつてたまるか。

——周囲が俺を褒め称えていたのは、お世辞だったのか？

今まで俺の目に見えていたもの、聞こえていたものが、すべて嘘だったように感じた。

「政務でお疲れなのでしょう。本日予定していた救貧院への訪問は、私一人で参ります」

「一人で……？ また手柄を独り占めするつもりか！」

「そんなつもりはございません」

セレーネは否定するが、こいつの行動は俺の立場を危うくする。

グラナティア王国には素晴らしい王妃がいる。賢く美しい王妃だ。頼りにならない王よりよほどいい……。声が勝手に聞こえてくる。幻聴だとわかっていても、どうにかなりそうだ。

これほど嫉妬に苦しむとわかっていたら、彼女を妻になどしなかった。

俺が選ぶべきだったのはセレーネではなく、デルフィーナのほうだったのではないか。

今もデルフィーナからは手紙が届いていた。『ルドヴィク様を諦めきれません』などと情熱的に、俺への愛を書き綴っている。

セレーネに目をやると、彼女は青ざめた顔で、胸の前で手を組んで沈黙している。怒鳴りつけたことへの気まずさから、俺は声をかけられなかった。

彼女から顔を背け、この場から逃げるように立ち去った。

——そうだ、デルフィーナと会おう。会って、自分の気持ちがどちらにあるのか確認すればいい。

これはセレーネとの結婚生活を続けるために必要なことだ。浮気ではない。ただ自分の気持ちを確認するために、デルフィーナと会うだけ——そう、思っていた。



それは突然の告白だった。

「俺の子が、デルフィーナに宿った」

裏切りの告白は、王妃に選ばれたあの広間で行われた。ルドヴィク様へ向けていた関心や感情が一気に冷え、失われていく。大理石の白い床は氷のようで、春だというのに空気が寒々しく感じた。

——ルドヴィク様はいつから浮気をしていたの？

シヨックを受けながらも、私は努めて冷静に問いかけた。

「本当にあなたの子ですか？」

「そうだ。俺の子だ」

ルドヴィク様は恥じるどころか、堂々と私に告げた。

動揺する私に向かって、デルフィーナは勝ち誇った顔で自分のお腹に手を当てて笑った。

「わたくしのお腹には、王の血を引く子がいますの。ルドヴィク様の子ですわ」

デルフィーナは私と王妃の座を争い、敗北した。けれど今、真の勝者は自分だと言わんばかりだ。私とルドヴィク様が結婚した後も、彼女は妻の座を奪うチャンスをうかがっていたのだ。

「まだ信じられないようね。それなら、お腹の子が王の子である証拠を見せて差し上げますわ！」
デルフィーナの瞳は赤茶色である。その赤茶色の瞳が、暗い赤に染まっていく——あれはルドヴィク様と同じ、王の力を使った時に見られる兆候だ。

「『なぜデルフィーナと浮気をしたの？』ですって。セレーネは不思議で仕方ないようですわね」

「はははは！ 不思議でもなんでもない。俺が本当に選ぶべきは、デルフィーナだったのだ！」

——ルドヴィク様と同じ力？ それなら、デルフィーナのお腹にるのは、本当に……

デルフィーナは赤い目を細め、指先で唇をなぞった。

「そうよ。わたくしの子にはルドヴィク様と同じ、他人の心を読む力がある」

また心を読まれた。グラナティア王家の直系だけに現れる特別な力。彼女のお腹に宿った子供が、ルドヴィク様の血を引いているなよりの証拠である。

デルフィーナは愉悅を含んだ笑みを浮かべ、傷だらけの獲物をさらにいたぶろうと、私のそばに近づいてきた。そして、耳元で囁く——

「ねえ、セレーネ。結婚して終わりではないのよ」

「デルフィーナ……どうして……こんな……」

私の声は弱々しく、か細く震えていた。

「ルドヴィク様！ セレーネの心の声を聞いたお腹の子が怯えていますわ！」

デルフィーナはわざとらしく言って、私の身体をどんっと突き飛ばした。

「セレーネはわたくしを殺そうとしているのです！」

「本当か？」

「そんなこと思っていないません。ルドヴィク様、デルフィーナの瞳を見てください！」

デルフィーナの瞳は、すでに元の色に戻っていた。どうやら力を継続しては使えないようだ。

「ああ……ルドヴィク様。お腹の子が伝えてきますわ。『デルフィーナは夫を奪った。殺してしまいたい』というセレーネの声を……！」

「なんだと？ セレーネ……お前は恐ろしい女だな」

ルドヴィク様は私を辱めるため、わざとデルフィーナに同調しているのだと気づいた。

今日、この広間で私に裏切りを告げたのも偶然ではない。デルフィーナは自分が敗北し、屈辱を味わった気持ちと同じ……いいえ、それ以上の屈辱を私に与えるために、この舞台を用意したのだ。

私が王妃に選ばれた日から、デルフィーナはずっと企んでいたに違いない。

「ルドヴィク様！ わたくしと子供を恐ろしいセレーネからお守りください！」

「わかった。セレーネ、お前はしばらく離宮に行け」

ルドヴィク様はあっさり私を捨てた。王宮にデルフィーナを残し、私を離宮へやるつもりらしい。

「お待ちくださいルドヴィク様。私は王妃です。浮気相手を王宮に置いて王妃を離宮へやるなど、前代未聞ではありませんか？」

「王の子になにかあつては困りますもの。ねえ、ルドヴィク様？」

「そうだ。その通りだ」

このままでは、私は王の子を殺そうとした重罪人に仕立て上げられてしまう。最悪、死刑である。

「私はデルフィーナにもお腹の子にも、危害を加える気などありません！」

「セレーネはこう言っているが。お前はと思う、デルフィーナ？」

「そうですね……セレーネがどうしても王宮に残りたいというのなら、わたくしの部屋から一番遠い部屋にしてくださいな」

私が必死で否定するのを、デルフィーナは笑って眺めていた。

私は圧倒的に不利な立場だ。彼女のお腹には、人の心を読む王の子がいる。デルフィーナが心を読んだと主張すれば、疑われるのは私である。

「デルフィーナ、心を読むのは構わないわ。でも、嘘だけはやめてほしいの。私があなたのお腹の子に危害を加える気はないとわかっているでしょう？」

改めて否定した。けれど、デルフィーナは私を悪人に仕立てるべく、さらに嘘をつき続けた。

『「デルフィーナが憎い、と聞こえる」『怖い』……お腹の子が訴えていますわ。可哀想に』

彼女の瞳の色は変わっていない。それなのに、ルドヴィク様は軽蔑のまなざしを私に向けた。

——裏切ったのはルドヴィク様のほうなのに、どうしてそんな目で私を見るの？

今日の朝までいつも通りに過ごし、私と朝食を食べていたルドヴィク様。こんな仕打ちが待っているなんて、思いもしなかった。まるで悪夢のようだ。

「セレーネ。今すぐこの場から立ち去れ。デルフィーナの前に姿を現すな！」

「ルドヴィク様……」

私から顔を背け、ルドヴィク様はデルフィーナに優しく語りかけた。

「デルフィーナ、これで安心だろう？」

「ええ、ルドヴィク様。ありがとうございます」

私という妻が目の前にいるのに、ルドヴィク様はデルフィーナに微笑み、二人は寄り添う。

「おかしな真似をするなよ、セレーネ。お前の態度次第で、王妃の地位も失うと思え」

——デルフィーナはルドヴィク様の愛情だけでなく、私から王妃の地位まで奪おうというの？

デルフィーナはボロボロの私を見て、くすりと笑った。

そうして私はルドヴィク様、形だけの妻となったのだった。

『ルビーノ伯爵家の令嬢デルフィーナが、国王陛下の子を身籠った』

その噂は、あつという間に国中を駆け巡った。

侍女から聞いた話によると、デルフィーナは新しいドレスやアクセサリ、靴や帽子まで揃え出し、お金を湯水のように使っているそう。

その一方で私は、『夫を奪われた王妃』『夫の愛を失った哀れな妻』と噂されている。

そんな噂を聞きつけた私の実家から、アルジェント侯爵であるお兄様がやってきた。お兄様を通された部屋は、王宮の隅にある狭く暗い部屋だった。古びた調度品が置かれた黴臭い部屋を眺めると、お兄様は私を慰めるどころか、わざとらしい溜め息をついた。

「無能な妹め。たった半年で浮気されるとは、情けないことだ」

お兄様は私を慰めに來たのではない。傷つけに來たのだ。

「実家に戻ってこれれると思うなよ？ お前の居場所はないからな」

「……戻る気はありません。私はまだ王妃です」

私はまだ、王妃の地位だけは奪われていなかった。

デルフィーナがルドヴィク様に『わたくしを王妃にしてくださいませ』と頼んでいるのは知っている。けれど、ルドヴィク様は渋っていた。妃の選定をした大臣たちが、デルフィーナを王妃にするのを阻んでいるからだ。それに私が教会からの評判がよいこともあって、政治的な判断から決めるかねている。

「ふん。どうせすぐに王妃の地位も奪われる。もし泣きついてきても家には入れないからな」

暴言を吐き続けるお兄様に、私は毅然とした態度で反撃した。

「お兄様が私を他人と思っていらいっしやるのですしたら、お互いの立場は王妃と侯爵。侯爵が王妃を罵ってよろしいのでしょうか？」

「なっ……！」

まさか言い返されるとは思っていなかったのだろう、お兄様は頬を引き攣らせた。次の言葉は王妃に向けて放つ言葉となるからか、なにも言えないでいる。

「ご用事はお済みのようですね。どうぞ、お引き取りください」

小刻みに震えるお兄様に対し、私は部屋の扉へ視線を送り、帰るよう促した。そこへちょうど、ノックの音が響いた。

「失礼します。アルジェント侯爵。挨拶のみというお話でしたが、お帰りはまだでしょうか？」

入ってきたのは、王妃付きの護衛を任されているジュストだ。彼は身長が高く、身体も鍛えられているため、お兄様の隣に立つだけで威圧感があった。ジュストは周囲から一目置かれる存在なのか、他の護衛が彼に敬語を使い、恭しい態度を取るのを目にしたことがある。

「護衛ごときが侯爵である俺を追い出すとはな！」

「帰りのお時間の確認にうかがっただけなのですが、なにか問題がありましたか？」

「ぐっ……！ 帰ればいいのだろう！」

お兄様はジュストの迫力に負け、部屋から出ていった。

お兄様が去ると、重苦しい空気が消えた。気がゆるみ、姿勢を崩して長椅子の背に身をゆだねる。

「身内の恥ずかしい姿をお見せしてしまいましたね」

「いいえ。セレーネ様をお守りするのが私の仕事ですのぞ」

ジュストは礼儀正しく、私に一礼する。駆けつけてくれた護衛は彼だけだ。デルフィーナの怒りを恐れ、私の周りからは日に日に人が減っている。

私の世話をしていた者はデルフィーナに奪われ、王妃のために用意されたものは、すべてデルフィーナに与えられた。それだけでなく、デルフィーナは勝手にこの部屋に立ち入って、私のアクセサリーやドレスまで持ち出そうとした。

目撃したジュストが阻止してくれなかったら、持ち物のほとんどを失っていたと思う。実家からの助けを期待できない私は、あるものでなんとか体裁を取り繕うしかない。

——私が自ら王妃の地位を捨てるまで、デルフィーナは嫌がらせを続けるつもりなのね。

でも、私の居場所は王宮だけだ。王宮を追い出されたら、身を寄せる場所はどこにもない。

「セレーネ様。食事が進んでいないようですが」

ジュストは出された食事が残っていることに気づき、心配そうな顔でこちらを見た。

「ごめんなさい。あまり食欲がなくて……」

「お身体を壊します。厨房に言って、セレーネ様のお好きなものを作らせましょうか」

気遣いは嬉しいけれど、精神的なショックのせいか、このところ、身体がだるくて仕方がない。それだけではない。時折、幻覚が見えるのだ。

目眩^{めまい}がして、額に手を当てて目を閉じた。暗闇の中に、また幻影が見える——

『王妃にしていただけなんぞ、おかしいですわ！』

『それはそうだが……。王妃はセレーネだ。大臣たちがな……』

苛立つデルフィーナと、洩るルドヴィク様。幻影であっても、その態度は強く激しい。

『ルドヴィク様はもう力を失ったでしょう？』

その言葉にぎくりとしたのは、ルドヴィク様だけでなく私もだった。即位した王は、次の王が現れると力を失う。ルドヴィク様が力を失ったということは、デルフィーナのお腹にいる子が、次の王だということだ。

『そ、それはそうだが……』

私にそれほど強気だったルドヴィク様が、デルフィーナには弱気な態度を見せていた。

『もし、わたくしの子が無事に生まれなかったら、次期王位継承者は王弟殿下。ルドヴィク様は力

を失った王族として王宮から追い出され、寂しく暮らすことになるでしょうね』

『デルフィーナ！ 俺を脅す気か！』

ルドヴィク様は声を荒らげた。

『脅すなんて、とんでもない。わたくしは王妃になりたいとお願ひしているだけのよ』

『だ、だが、大臣が……それにセレーネは選定された妃だ……』

『わたくしを選ばなかったあなたが悪いのですわ』

ルドヴィク様の喉元を、デルフィーナの赤い爪がゆつくりと傷つけていく。抵抗できず、青い顔で震えるルドヴィク様に、私は絶望した。

——これは幻影よ。ルドヴィク様が力を失ったとは限らないわ。でも、もし事実だとしたら……？

デルフィーナの子が王になったら。デルフィーナに対して遠慮がちなルドヴィク様の姿を思うと、不安がこみ上げてくる。

「……夢よ。これは悪い夢なのよ」

——現実が苦しいのだから、夢くらい幸せな夢を見たいのに……

今までだって私は幸せとは言えなかった。お父様が亡くなってから、辛いことばかり起きている。

『ルドヴィク様は、わたくしとセレーネ、どちらを愛していらっしゃるの？』

——やめて。その先を言わないで。

幻影だとわかっていても、『セレーネのほうが大事だ』と言ってほしいと、懸命に願った。

『俺が愛しているのは、デルフィーナだ』

デルフィーナは満足げに笑った。

『わかった。お前を王妃にしよう』

私が絶望したのと同時に幻影は消えた。涙が頬を伝い、顔を両手で覆った。

「セ……様……セレーネ様？ いかがされましたか？ 気分が悪いのですか？」

ジュストの声が聞こえて、我に返った。

「ごめんなさい……。少したた寝をしていたみたい」

私は顔を上げ、泣いていたことを知られたくなくて、無理やり笑顔を作った。

「眠るのは構いませんが、お休みになるのですしたら、私は下がります」

私が王妃としての権力を失っても、ジュストは私への敬意を忘れない。

彼はいつまで私の護衛でいてくれるだろうか。私が王妃でなくなったら、唯一の味方であるジュストもきつといなくなる。いなくなる前に、感謝の気持ちを伝えたい。

——きつと、その日は遠くないから。

「私から人が離れていく中、ジュストが私の護衛を務めてくれたこと、とても感謝しています」

「なぜ、そんな別れのような言葉をおっしゃるのですか？」

王妃付きの護衛としてジュストが配属された時、彼は他の人たちと違い、お世辞も賛辞も口にしなかった。周囲から一線を引き、私を静かに観察しているような印象を受けた。会話するようになったのは、彼が私を王妃と認め、心を開いてくれたからだと思った。

冷静に人の本質を見極める人。でも、それは彼の身を危うくするだろう。

「近いうちにルドヴィク様は、デルフィーナを王妃にするでしょう。そうなれば、私の立場は今以上に危うくなります。危険だと思ったら、逃げてください」

先ほど見た二人のやりとりは生々しく、ただの夢とは思えなかった。

ジュストは私から目を逸らし、うつむいた。私がこの部屋に追いやられてから、外でなにが起きているかはジュストのほうが詳しい。彼はやりきれないという表情を浮かべた。

「セレーネ様は王妃として立派に振る舞ってこられた。なぜ、このように冷遇されなくてはならないのか……！」

部屋に重い空気が漂った。この部屋に用意されていたのは質素な水差し、木の椅子とテーブルくらいだ。白い花瓶はジュストが持ってきてくれたもので、花が飾られている。

テーブルには羽ペンと紙があった。ルドヴィク様に手紙をと思い、頼んだものだ。けれど手紙を書いたところで渡せる人がいない。ジュストは私の護衛とはいえ、国王であるルドヴィク様に気軽に近づける身分ではなかった。

ルドヴィク様からは、あれから一度もお声がかかっていない。

——妻の私を煩わしいわづらと思うているのでしょうか。

羽ペンを握り締め、じっと紙を見つめていると、兵士の声が扉の外から聞こえてきた。

「セレーネ様、陛下が呼びです」

「ルドヴィク様が？」

嫌な予感がした。それはジュストも同じだったようで、兵士の呼びかけを断った。

「セレーネ様は気分が悪い。今は……」

「ジュスト、平気です」

ぎこちない作り笑いを貼りつけ、長椅子から立ち上がった。部屋を出ると、大勢の兵士たちが私を待ち構えていた。彼らは私の護衛ではなく、監視をしているのだ。

「国王夫妻の部屋へご案内します」

——夫妻？ 夫妻とは、私とルドヴィク様ではないの？

兵士に悪気はなかったのかもしれない。でも今の私には、その言葉が棘とげのように突き刺さった。回廊を歩いている間、兵士たちは私を警戒するように周りを囲んでいた。まるで罪人だ。

ルドヴィク様の部屋の前に立つと、二人が楽しげに会話する声が聞こえてきた。

「ルドヴィク様をずっと慕っておりましたのよ。それなのにセレーネをお選びになるなんて」

「優秀なセレーネを妃にしろと周囲がうるさかったからな」

「セレーネのどこが優秀なんですか？ 優秀だったのは学者のお父様でしょう？ 大臣が仲間意識から、もてはやしただけの無能な王妃ですわ」

——聞かなければよかった。

王妃に選ばれ、今まで頑張ってきた。その結果がこれなのだろうか。

部屋の前に本人がいるとも知らず、二人は私の悪口を言って盛り上がっていた。

「やっと来たか、セレーネ」

訪れた私に気づいたルドヴィク様は、わざとらしい溜め息をついた。

「……お待たせして申し訳ございません」

すっかり弱りきった私の姿を見て、デルフィーナはくすりと笑った。

「陛下をお待たせするなんて、本当に無能な妃ね。王妃ならおそばに控えているものでしょう？」

私を王妃などと思っていはいないくせに。馬鹿にした態度が、その本心を物語っている。

「根拠のない悪口を言いふらすのは、やめていただけますか？」

王宮内に流れている私の悪評は、デルフィーナの口から出たものばかりだ。

「それはあなたのほうでしょ？ ルドヴィク様、セレーネが心の中でわたくしを罵っていますわ」

「なんだと！」

デルフィーナの瞳が血のように赤く変化した。

「悪口など言っていないせん！」

「嘘ばかり。本当に恐ろしい女！ ルドヴィク様、なんとかしてください」

「なんてことだ。早く話を済ませよう」

「ええ、気分が悪いわ……」

デルフィーナはわざとらしくルドヴィク様にしなだれかかり、扇子の陰で笑った。

「セレーネ。お前は王妃としてふさわしくない。よって、この時をもって王妃の地位を剥奪する！
以後、お前のことは側妃として扱うこととする」

とうとう、この日が来てしまった。

いつか来るとは思っていた。だが、私が思っていたよりもずっと早かった。お父様の遺志を継ぎ、
グラナティア王国を豊かな国にしたいという目標は、この瞬間から二度と叶わない夢となった。

「セレーネ様、失礼します」

両脇を兵士に囲まれ、拘束されそうになったのを、私は拒んだ。

「私は罪人ではありません。自分の意思で部屋に戻ります」

強い口調ではなく、極めて冷静に告げると、兵士たちは気まずい顔をして頭を下げた。

デルフィーナは私が半狂乱になって兵士に連行されるのを見たかったのだろう。彼女は面白くな
さそうな顔をしていた。

兵士たちは悪くない。ルドヴィク様とデルフィーナの命令に、逆らえないだけなのだ。

私を庇っていた大臣たちも、もはやこの決定は止められなかった。デルフィーナのお腹にいるの
が次の王であるなら、大臣たちはかなり混乱しているに違いない。彼らは自分たちが選んだ王妃で
ある私が、次の王を身籠るものだと考えていただろうから。

「デルフィーナ。これは妃候補として共に争い、学んできた者としてお願いします。どうか人々へ
の思いやりを忘れず、この国を豊かな国へ導いてください」

「ええ、そうね。わたくしはあなたから学んだわ。おとなしくて気弱そうな相手であっても、隙を
見せれば足をすくわれる。油断は禁物だつてことをね？」

「そういう意味で言ったわけでは……！」

「黙りなさい！ 誰に向かって口をきいているのかしら？」

デルフィーナは私の声を聞きたくもないというように、扇子を強くパチンと閉じた。

「セレーネを連れて行って！ わたくしの許可なく、セレーネへ物を与えることを禁じるわ！」
デルフィーナが兵士に命じる声が響いた。これまで以上に私を苦しめ、追い詰めるために――

王妃の地位を奪われた後、さらに私の生活は苦しくなった。

石の壁には絵画やタペストリーが飾られていたはずが、いつの間にか取り外されていた。物が少しずつ減り、絵画一つない部屋は寒々しく感じた。

――デルフィーナが命じたのでしょね。

地位は側妃でも、扱いはほぼ罪人と同じだ。デルフィーナが与えてよいと決めたもののしか届かない。食事は一日二回、冷めたスープと黒いパンは量も少なく、器も粗末なものが使われた。

兵士の監視も途切れることなく続いている。

デルフィーナはそんな私にさらに苦しみを与え、少しの安らぎも与える気はないらしい。

「セレーネ。あなた宛てに手紙が届いていたから、王妃であるわたくしが直々に持つてきてあげたわよ」

王妃となったデルフィーナは、大勢の兵士を引き連れて私のもとへやってきた。その手には私の実家、アルジェント侯爵家の紋章が捺された手紙が握られていた。手紙の封緘が解かれている。

「勝手に読んだのですか？」

「あら、侯爵は構わないと言っていたわよ？ だから、読んであげたの」

「お兄様が読んでいいと？」

「ええ、そうよ。今、あなたのご実家は大変なの。あなたがわたくしを殺そうとしているでしょ？」

爵位と領地を没収されないよう、必死にわたくしのご機嫌取りをしているわ」

お兄様が王宮に來ない理由がわかった。デルフィーナは『セレーネは実家と手を組んでわたくしを殺そうとしているわ！』などと主張して、アルジェント侯爵家を追い詰めたのだろう。

「殺そうだなんて、少しも思っていないません」

「それはどうかしら？ はい、どうぞ。頼りになるご実家からの手紙よ」

彼女は手紙をすんなり渡してくれた。けれど、それを読むべきではなかった。読んでしまえば、私が誰からも必要とされない存在だとわかってしまうから。

『アルジェント侯爵家はセレーネと一切無関係である。デルフィーナ王妃の好きにしてもらって構わない。無能な妹は侯爵家には必要ない人間だ。死刑になったところで誰も悲しまないだろう』

――死刑。お兄様は私の死を望むの？

手紙の内容を目にした瞬間、目眩がして、吐き気を催した。

「セレーネ様！」

そばに控えていたジュストが、倒れかけた私に駆け寄った。デルフィーナはそれが気に入らなかったのか、彼を睨みつける。

「ジュスト。あなた、ルドヴィク様の護衛騎士に推薦してあげたのに、断ったそうね」

「自分の主はザカリア王弟殿下。あの方以外に忠誠を誓う気はありません」

ジュストは堂々とした態度でデルフィーナと向き合い、冷やかな目を向けた。

——ザカリア王弟殿下？ ジュストは、王宮に所属する騎士ではなかったの？

ザカリア様は、レガール地方を治める有能な公爵として有名だ。

当時第二王子でありながら後見人のいなかったザカリア様は冷遇され、辺境へ追いやられた。

与えられたのは辺境の荒地。そこでザカリア様は鉱業に力を入れ、レガール地方は驚異的な発展を遂げた。今では鉱石を求める商人や製鉄業を営む者が集まる工業都市として、繁栄している。

冷遇された第二王子は実力で、王家にとって無視できない有力貴族となったのだ。

そんなザカリア様は滅多に領地から出ず、『ひきこもり殿下』などと不名誉な名で呼ばれている。

「自分は王宮とザカリア様の連絡係として王宮に部屋を頂く身。セレーネ様の護衛が足りていないと判断し、手を貸しているだけです。なにか問題がございましたか？」

ザカリア様の名前を出されてはデルフィーナも強く出られず、悔しそうに唇を噛んだ。

私の護衛が少なくなる以前から、ジュストはそばにいた。連絡係と言っているけれど、ジュストはザカリア様が放った、王宮を監視するスパイなのかもしれない。

「よくあんな変わり者に仕えているものだわ。ルドヴィク様のほうが素敵なのに！」

「主君の悪口はそこまでしていただきたい」

「……っ！」

ジュストの恐ろしく低い声にデルフィーナは気圧され、言葉を詰まらせた。王妃の権力を振りかざす彼女にとってジュストの態度は許せないものだったらしく、ぶるぶると手が震えている。

「よ、よくも王妃のわたくしに逆らったわね！ ジュスト、後悔するわよ！」

デルフィーナは顔を赤くして捨て台詞を吐き、ジュストを睨みつけて去っていった。

「ザカリア様の名前は、思った以上に利きますね」

ジュストは平然としていたけれど、私は心配だった。

「ジュスト。庇ってくれてありがとう。でも、デルフィーナを敵に回すのは危険だわ。私のことは構わずに、どうか自分の身を守って……」

ザカリア様がいかにも有能で、力を持っているとしても、今の王宮はデルフィーナによって支配されている。あの勢いからいつて、ルドヴィク様もデルフィーナの言いなりになっているのだらう。

「ご心配なく。自分の身は自分で守れます。ですが、セレーネ様は違います。このまま王宮にいるのは、セレーネ様こそ危険なのではありませんか？」

「そうね……」

それは気づいていた。食事が減らされただけでなく、ドレスやアクセサリーもなくなっている。デルフィーナは私の着替えを手伝う侍女に命じ、身の回りの物を盗ませているのだ。着替えの時はさすがにジュストも部屋に入れないので、どうしても完全に防ぐことはできない。

——植物研究録だけは守らなくては。いつか、この書が国の危機を救うかもしれないのだから。植物研究録の原本は、アルジェント侯爵家に保管されている。でも、お父様が亡くなってからも続けていた研究部分は、私が持っている植物研究録にしか記されていない。

今は戸棚に鍵をかけ、さらに箱の中に板をはめて二重底にして、奥に植物研究録を隠してある。

「セレーネ様、完全に逃げ道を塞がれる前にご決断されたほうがよろしいかと」
「ええ。わかっています……」

私が侯爵家に戻れないと察したデルフィーナは、ドレスやアクセサリーを奪った。お金になるものがなければ、逃げたとしても生きていく方法がない。

すべてを奪われ絶望していく私を、自分の目の届く場所で見物し、楽しむつもりなのだ。

私はジュストに背を向け、窓に手を触れた。冷たいガラスの感触が指先から伝わってくる。

「ルドヴィク様に私への愛情が残っていれば、助けてくれるはず……」

そんな淡い期待を抱いた瞬間。扉しか見えない外の景色が歪み、また幻影が現れた。

ルドヴィク様の執務室にデルフィーナが押しかけ、必死になにかを話している――

『セレーネはジュストを使つて、わたくしを殺すつもりなんだわ!』

『セレーネは部屋から出ず、おとなしくしている。お前には大勢の兵士をつけているだろう?』

『護衛をつけるのは当然ですわ。ルドヴィク様はどちらが大切なの?』

『もちろん、デルフィーナだ』

ルドヴィク様は迷わず答える。幻影だとわかっていても胸が痛んだ。

『それに、ジュストはルドヴィク様よりザカリア様が大事だとおっしゃったのよ。王を馬鹿にしていますわ。ジュストを捕らえて罰を受けさせましょう』

『ザカリア……? 馬鹿げた話だ。王を軽んじることは許さん!』

ルドヴィク様の怒鳴り声を最後に幻影は霧散し、目の前から消えた。

――これは本当に、幻なの?

現実味がありすぎて、もはや幻影には思えない。嫌な予感がして、ジュストのほうを振り返る。

「ジュスト、今すぐ王宮から逃げて」

「セレーネ様? いかがされましたか?」

「王宮にいては危険だわ。デルフィーナは自分に逆らう人間を許さない。きっとあなたを破滅させる罫を仕掛けてきます。逃げられなくなる前に、早く逃げてください」

必死に懇願する私を見て、ジュストはうなずいた。

「そうでしょうね。ですが、セレーネ様もこのままでは危険です。我が主君、ザカリア様に保護を求めているかがでしょうか?」

「ザカリア様に?」

「セレーネ様が逃げれば、デルフィーナは追手を放つでしょう。追手から守れるのは、ザカリア様しかいらっしやいません」

「ジュストは、私に逃げると……?」

「あなたを死なせたくありません」

――このままでは、私は死ぬ。いいえ、殺される。

罪をでっちあげることくらい、デルフィーナはなんでもない。死刑台に立つ自分の姿を想像すると、寒気が走った。

「逃げられる時に逃げろとおっしゃったのはセレーネ様です。セレーネ様が王宮の脱出を望むなら、

お助けします。どうなさいますか？」

王宮に残って死ぬか、逃げてザカリア様に庇護を求めるか——生き延びる方法の一つだけ。

「……王宮を、出ます」

夫も地位も奪われ、実家からも捨てられた私はもう、なにもかも捨てて逃げるしかないのだ。

——再び、夢を見た。

『ザカリア様から領地へ戻るよう命じられました』

馬を用意し、出発しようとしているジュストの姿が見える。ここは、王宮の前だ。

『急だな』

ルドヴィク様が背後の兵士たちを手で制し、下がるよう目で合図した。ジュストが自分から去る
とは思っていなかったようで、戸惑っているのがわかる。

けれど、デルフィーナは違う。ジュストに罰を与えるつもりが当てが外れて、悔しげに扇子をき
つく握り締めていた。それでもなお諦めきれないのか、瞳を赤く染めている。

けれど、ジュストはデルフィーナに一瞥もくれず、心を読まれる前に馬の手綱を引いた。

『それでは、失礼します』

ジュストが去ると、ルドヴィク様はデルフィーナを宥めるように告げた。

『目障りな奴がいなくなったのだから、もうこれでいいだろう』

『わたくしに逆らった事実はありませんわ！ それに、あの男は必ずセレーネを助けに来るでしょ

う。今のうちに追っ手を差し向けるべきですわ！』

『下手についてザカリアが出てきたら厄介だ。誰も忍び込めないよう警備を強化すればいい』

デルフィーナほどジュストに関心がなかったのか、ルドヴィク様は面倒だという顔をして、王宮
の中へ入っていった。それを見送るデルフィーナの顔は、苛立ちで歪んでいる。

『まあ、いいわ……。これでセレーネを守る人間はいなくなった』

なにを思いついたのか、デルフィーナは残酷な笑みを浮かべた。

『そうだわ。ルドヴィク様が二度となびかないように、あの顔を醜くしてやればいいのよ！』

夢の中で『危険だ』と誰かが言ったような気がした。一体誰が……と思った瞬間、夢から覚めた。

——これは夢……夢よね？

目覚めた後も、夢と現実の境界が曖昧に感じられるほど生々しい夢だった。

眠っていたはずなのに疲労感が残り、身体が重い。扉の隙間から夕暮れの赤い光が差し込んでい
る。テーブルの上には読みかけの本が置かれていた。読書の途中で眠ってしまったのだ。

「居眠りなんて、前はこんなことなかったのに……」

体調も優れず、恐ろしい夢を見続ける。もう限界だった。本当は『助けて』と誰かに縋りたい。

——まだ希望はある。ジュストが私を助けようと頑張っているのに、諦めるわけにはいかないわ
逃げたふりをしたジュストが王宮に忍び込み、私を連れ出してくれる算段だ。王宮を出た後はザ
カリア様を頼り、レガーレ公爵領を目指すことになっている。

部屋の外に誰かの気配を感じ、ジュストが迎えに来たのだと思った瞬間——

「ジュストなら来ないわよ」

やってきたのは、デルフィーナと兵士だった。逆光の中、デルフィーナたちは黒い影となって、私の命を刈り取る不気味な死神のように見えた。

——まさか……！ デルフィーナのお腹にいる子供が、ジュストの心を読んだの？

「心は読めなかったけど、行動を予測することくらいできるわよ」

デルフィーナの瞳は、夕暮れの赤よりも赤く染まっていた。

ここには危険だと、本能が告げている。後ずさりした背中が壁にぶつかり、逃げ場を失った。「残念。ネズミ一匹、王宮へ入り込めないように警備を厳しくしてあるわ。今頃王宮に入れなくて、ジュストも焦^{あせ}っていることでしょうね」

すべて、デルフィーナに見抜かれてしまっている。

——失敗したんだわ……。私はもう、逃げられない。

「ふふふっ。そう、あなたたちの計画は失敗したの。ねえ。セレーネ？ 力を失ったルドヴィク様なら騙^{だま}せても、王の子を宿したわたくしを騙せると思わないことね！」

「ジュストは私に同情しただけで、なにも悪くないの！ だから……」

私が声を上げると、デルフィーナは兵士たちに目配せした。先ほどの夢を思い出し、ハツとする。デルフィーナは、私の顔を醜くすると言っていないかっただろうか。

「セレーネが暴れたから仕方なく剣を抜いたと、ルドヴィク様には報告するわ」

兵士の手が、剣の柄に触れる。

デルフィーナは、私の顔に傷をつけるつもりだ。最初からジュストを捕まえる気はなく、逃走計画を暴かれた私が抵抗して暴れたからと、口実にしたかっただけ——逃げなければ。

壁伝いになんとか逃げようとする私を、デルフィーナが笑って見ている。

どんなに逃げても部屋は狭く、あっさり隅に追いやられた。銀色の冷たい刃が迫る。

——誰か、助けて！

もう終わりだと諦めかけた時——

「デルフィーナ様、大変です！ 早く部屋へお戻りください！」

侍女が駆けつけ、兵士が動きを止めた。デルフィーナは邪魔をした侍女を睨みつける。

「いいところだったのに……！ なにが起きたの？」

「も、申し訳ございません。そのつ……！ ザカリア王弟殿下が、王宮にいらっしやいました！」

「それがどうしたというの？」

「デルフィーナ様を一刻も早く安全な場所に隠さねばと、とルドヴィク様が心配して探しておられます。早くお戻りください！」

「ルドヴィク様が？ それなら、仕方ないわね」

デルフィーナはルドヴィク様が心配していると聞いて悪い気はしなかったらしく、私のほうを見て、勝ち誇った笑みを浮かべた。

ザカリア様は王位継承権を持っている。ルドヴィク様が力を失った今、デルフィーナの子になにかあれば、王になるのは力を失っていないザカリア様である。

——でも、『隠す』とは、どういうことなの？

ライバルなら、デルフィーナの力を利用してザカリア様に罪を着せ、排除することだってできるはずだ。それをわざわざ姿を隠してザカリア様から遠ざけるのは、違和感があった。

「ルドヴィク様のところへ戻るわよ。セレーネの周辺だけは警備を固めておきなさい」

滅多に領地から出ないというザカリア様が王宮へやってきた。ジュストが知らせてくれたのだろうか。おかげで私は命拾いをした。

「待って、デルフィーナ」

去ろうとしたデルフィーナを呼び止めたのは、どうしても聞きたいことがあったからだ。

「あなたはルドヴィク様の愛を手に入れた。それなのに、どうしてここまで私を憎むの？」

わずかに開いたデルフィーナの唇が震えていた。怒りを抑えた声で、彼女は語った。

「王妃になれなかったせいで、私が家族からどんな扱いを受けたと思う？」

デルフィーナは家族から愛されて育ったのだと、よく私に自慢話をしていた。

「王宮から戻ったわたくしを家族は役立たずと蔑んだわ。友人たちも離れていった」

「デルフィーナ……」

デルフィーナもまた、すべてを失ったのだ。だから私からも、同じように奪おうとした。

私は家族から期待されていなかった。もともと愛を持っていなかった私と、あったはずの愛を失ったデルフィーナ、どちらが不幸なのだろう。

でも、私にはルドヴィク様がいた。『俺に必要なのはセレーネだ』と言ってくれた。あの言葉が、

孤独な私を救った。ルドヴィク様の本心はどうあれ、私にとってあれば、愛だったのだと思う。

——そのルドヴィク様は今、デルフィーナを愛していて、もう私を必要としていない。

デルフィーナは私から顔を背け、去っていった。

私は震える手で自分の身体を抱き締め、誰もいなくなった部屋の中で小さく呟いた。

「お父様……」

もはや縋れるのは、亡くなったお父様だけだった。ジュストの助けは妨害され、周囲は厳しく警備されて、ここから逃げ出すことは不可能だ。

絶望の中、机の引き出しを開けた。そこには王宮の庭園で拾った金色の実が入っていた。多くのものを奪われた中、わずかに残った持ち物だ。金色の実を手にとると、ルドヴィク様に怒鳴られた時のことを思い出した。

——私は誰にも愛されない。夢も果たせない……

「知識を使つて、この国を豊かにしたかった……」

金色の実が力を失った指から落ちて、床に転がった。剣で傷つけられることはなかったけれど、身も心もボロボロだった。無事だった自分の顔をなでると、頬は涙で濡れていた。

ルドヴィク様が私を助けることはない。デルフィーナの心配はしても、私のことは気にもかけていなかった。ルドヴィク様ははじめから、私を愛していなかったのだろうか。

「そんなはずは……」

ない、とは言い切れなかった。優しかったのは結婚した当初だけで、あとはずっと叱られていた。

思い出すのは笑顔より、不快そうな顔をしたルドヴィク様だ。

どんなに頑張っても、無意味だった——涙が溢れて止まらない。

「このまま……ここで死んでしまったほうがいいのかしら……」

その場にうずくまった。立ち上がる気力もなく、口にした言葉は誰にも届かない。

届かないと、思っていた。

「……俺を領地から呼びつけておいて死を選ぶとは、どういうことだ」

泣いてうずくまる私にかけられた言葉は、決して優しいものではなかった。

でも、それが私を助けるためにやってきた人なのだと、自然と理解した。

——誰も助けに来ることはないと思っていたのに……一体誰が……

「あなたは……？」

黒い髪。金色の瞳。彫刻のように均整のとれた顔立ち。漆黒の上衣は簡素だけれど、着飾らなくても王族の権威を感じさせる風格を持つ。

胸元に銀のペンダントが見えた。銀の透かし彫り細工の紋章は、彼の身分を示す。王冠は王族の、盾は領地を保護する者であることの証明。金の獅子は力を表し——紋章からわかる階級は、公爵。

つまり、この方は——

「ザカリア」

まるで王であるかのような不遜な態度。彼は不機嫌そうな顔で、私に手を差し伸べた。



——これで、わたくしが勝ったと思ったのに。

ザカリア様は王宮にジュストがいないとわかると、すぐに去っていったそうだ。

情報が曖昧なのは、心配性なルドヴィク様がわたくしを隠し部屋から出してくれなかったせいだ。その間、外の情報がわからず、王妃の部屋へ戻れたのは、夜も更けた頃だった。

そして、最悪な報告を受けた。報告に来た兵士は怒りを恐れ、平伏していた。

「セレーネがいなくて？」

セレーネの逃亡計画は失敗に終わったはずだった。

「まさか、ザカリア様がセレーネを助けた……？」

たとえジュストに頼まれても、ザカリア様が手を出すことは絶対にはずれていた。

セレーネは王宮で孤立無援、実家から疎まれる、名ばかりの侯爵令嬢。ザカリア様が彼女を助けるメリットはない。むしろルドヴィク様を敵に回して、立場を悪くするだけだ。

それだけではない。ザカリア様は社交嫌いで領地から出ず、有力貴族たちが娘を嫁がせようとしても断り、パーティーなどの華やかな場の出席すらも拒む。やがてついた名が『ひきこもり殿下』。そんな人がセレーネを助けると予測できただろうか。

「ルドヴィク様のせいよ！ ザカリア様のどこが恐ろしいのか、さっぱりわからないわ！」